



转生王女与天才千金的魔法革命 番外（R18）

これは少し先の未来のお話。【这是关于不久后的未来的话题。】

＊ ＊ ＊

精霊は魔力を糧とする霊的な存在である。【精灵是以魔力为食粮的灵的存在。】

それは大精霊であっても括りとしては精霊なので魔力を欲する性質は変わらない。【这即使是大精灵也是因为精灵的关系使得那想要魔力的性质不变。】

精霊は自らの好む魔力に引き寄せられる。どの精霊が好むのか、その魔力の性質と精霊の相性がそのまま魔法の适性となる。

【精灵被自己喜欢的魔力吸引。若喜欢哪个精灵，则对应魔力的性质和精灵本身的相性即等于是魔法的适应性。】

これが精霊の基本だ。大精霊だってこの基本的な性質から変わっていない。まあ、何が言いたいかというと大精霊であっても好みの魔力はあるし、それを糧としたくなくとも言う訳だ。

【此为精灵的基本。大精灵身上这个基本的性质也没有改变。嘛，要说想讲什么那就是即使是大精灵那也有喜欢的魔力，并想要把它作为粮食。】

そして大精霊は精霊契約者、つまり人としての肉体も持っている。精霊としての欲求と人としての欲求。この2つが重なると、端的に言うとうと执着へと変わる傾向がある。

【而且大精灵还拥有精灵契约者，也就是作为人的肉体。作为精灵的欲求和作为人的欲求。简单地说若这两者叠加在一起，那就有变成是执着的倾向。】

では、精霊契約者として名を连ねる事になったユフィリアはどのようなのだろうか？【那么，作为精灵契约者而联名的尤菲莉亚又如何呢？】

その答えは、もう執心のなまでの愛情表現だった。【この答案是、已演变成那执着的爱情表现了。】

「ユフィ……！　もう、む、りい……！」【“尤菲……！已经、不、行……！”】

ベッドに押さえつけられるように体を沈ませるのはアニスフィア。その頬は朱色に染まり、目は涙で濡れて潤んでいる。呼吸は落ち着かないのか、大きく吸い、そして吐き出す。

【身体被压在床上一样的感觉像是在下沉的是安妮丝菲娅。她的脸颊泛着朱红，眼角被泪水濡湿。呼吸似乎还没有平静下来，用力的吸了一口，然后又吐了出来。】

そんなアニスフィアを抑え付けながら見下ろすユフィリアは仅かに息を荒くするのみだ。頬に朱に染まってはいるものの、アニスフィアに比べればその色は濃くない。

【这样的安妮丝菲娅就这么被尤菲莉亚压制着，而对方只是一边低头看着她，一边微微喘着粗气。虽然脸颊也染上了朱红，但和安妮丝菲娅相比颜色并不深。】

精霊にとって魔力は糧であり、魔力を取り込む事は食事と言い換えても良い。その存在を保つ為に魔力を求む精霊だが、大精霊に至っては少しばかり事情が違ふ。糧である事は間違いないが、どちらかと言えば人間で言う所の趣向品に近い。

【对精灵来说魔力是它的食粮，吸收魔力就像是吃饭一样。精灵是为了保持住存在而追求魔力，大精灵的情则况少许有些不同。毫无疑问是想要进食的意志，但总的说来更接近人类口中那所谓的情趣品。】

精霊と違って大精霊は、その大精霊を宿す精霊契約者は肌の触れ合い、つまり接触をもって魔力を取り込む事が出来る。手を繋ぐだけでも良いし、抱き合うだけでも魔力の摂取自体は可能ではある。

【与精灵不同的是大精灵，拥有大精灵的精灵契约者可以通过肌肤的接触，也就是直接接触来获取魔力。无论手牵手也好，抱在一起也好，直接从肌体本身获取到魔力的可能都是存在的。】

しかし、それは微々たるものであり……つまり、何が言いたいかと言うと。魔力を求めるならばこうした肌の触れ合い、関事に耽るのが

一番効率が良いのである。

【但是，那能够获取到的也仅是微乎其微……即，要说想说什么的话。就是比起通过肌肤相亲的方式获取魔力，那还得是闺中之事才最有效率。】

「……まだ、足りないです」 【“……还，远远不够。”】

「どれだけ貪るのさあ!? もう、クラクラするからおしま、ふむう……!? むう——っ!? む、ぐ、う……! 」

【“你到底想要多少啊!?都，已经快晕了，嗯……!? 嗯——!?嗯、唔、唔……!”】

抗议の声など聞こえないと言わんばかりにアニスフィアの両頬に手を添えて押さえつけ、ユフィリアは唇を深く重ねる。

【仿佛根本听不到她的抗议似的用手按住安妮丝菲娅的两颊，尤菲莉亚将嘴唇深深的与她交叠在一起】

夺われた唇、差し込まれた舌がアニスフィアの舌を舐り始めて一体どれだけの時間が経ったのか。それはもうアニスフィアにはわからないし、ユフィリアに至っては気にしてさえいない。

【从被夺走嘴唇、然后安妮丝菲娅的舌头也被插入的舌头舔舐了起来开始到底有过了多久? 对此安妮丝自己已经完全变得不知道了，尤菲莉亚甚至毫不在意。】

酸欠と繰り返される口付けによって与えられる快感にアニスフィアの時間感覚が麻痺していく。思考も覚束なくなったアニスフィアは、ただ藻掻くようにユフィリアの腕を掴んだりする。しかし、長いこと貪られ続けたアニスフィアの抵抗はあまりにもか弱いものだった。

【由于缺氧和反复的亲吻所给予的快感，安妮丝菲娅的时间感已渐渐麻痺。思维被束缚住的安妮丝，她只能是在挠着尤菲莉亚的手臂。但，长时间被所要了的安妮丝这样的抵抗实在是太弱了。】

「んんんっ……! んや……っ、ふう、ん……! んん——っ! んっ……んんっ……! 」 【“嗯嗯嗯……! 嗯呀……嗯，唔，嗯……! 嗯嗯! 嗯……嗯嗯……! ”】

合間を見て息継ぎをするも、ユフィリアが解放してくれる気配は一向に見えない。息苦しさにあニスフィアは力なく背中や腕を引っ掻いたり、髪を掴んでみたりするもびくともしない。

【瞅着间隙喘了口气，她丝毫看不出尤菲莉亚有想要释放自己的迹象。由于呼吸困难，阿尼斯菲亚无力地抓着对方的背和胳膊，也试着去揪住对方头发，但却纹丝不动。】

その間にも吸い上げられるように奪われていく魔力を実感するのだ。それが快感や酸欠に并ぶ抵抗の力を奪う要因でもあった。

【在这段时间里也能切实感受到魔力在被被吸走。这也是在并存的快感和缺氧中抵抗力被夺走的主要原因。】

魔力を急激に吸われるとどうなるのか？ 簡単に説明すれば脱力してしまうのだ。それに魔力を吸われる感覚というのは奇妙だが、すっかり慣らされてしまったアニスフィアにとってはくすぐったさに近い。これが微量の摂取なら心地良さにもなるのだが、こうも貪られては溜まったものではない。

【突然被吸了魔力的话会怎么样呢？简单地说就是虚脱。而且被吸了魔力的感觉虽然很奇妙，但对于已经完全习惯了的安妮丝菲娅来说近乎于只是有点痒。如果是被微量摄取的话连着心情也会变好，可像这样被索要的话就不是能累积的程度了。】

ふと、両頬を包み込むユフィリアの指があニスフィア耳に伸びる。耳の輪郭をなぞられるように触れられたアニスフィアの背筋にぞくぞくと悪寒じみた快感が走り、体が弓なりに持ち上がる。

【突然，尤菲莉亚包裹着两颊的手指伸向了安妮丝的耳朵。耳廓像是给划过一样被触摸着，安妮丝在一阵恶寒中感到脊背有快感掠过，身体也像弓状向上抬起。】

「ふむうー!? んんうッ、ンンーーーーッ!?」 【“唔姆——!? 嗯嗯， 嗯——!?”】

耳はやめて、と言いたくても言葉には出来ない。引き折り出されるように持って行かれた舌を甘噛みされ、比較的弱い耳に触れるのは耐えがたい感覚となってアニスフィアを襲う。

【不要动耳朵了，即使想这么说她也无法用语言表达。卷起的舌头像被重新折出来拿去一样被甜咬，较弱的耳朵在被触碰后产生难以忍受的感觉向安妮丝菲娅袭来。】

アニスフィアの思考は真っ白に染まって、脳の奥で星が弾け飛ぶような感覚が奔る。同時にかくんと抵抗の力が抜けてアニスフィアの体がベッドに沈む。

【安妮丝菲娅的思考被染成了一片空白，大脑深处似是有星星迸射而出的感觉。同时失去了抵抗之力的安妮丝任凭身体在床上陷了下去。】

アニスフィアの様子に気付いたユフィリアが彼女を解放すれば、ぐったりとアニスフィアが力なく体を投げ出す。アニスフィアは震えながら息を零し、目には涙の迹浮かんで頬を汚している。

【注意到安妮丝菲娅的样子的尤菲莉亚放开了她，瘫软无力的安妮丝就那么让身体被扔了出去。安妮丝颤抖着吐出一口气，眼中浮现出的泪痕弄脏了脸颊。】

「……ひ……あ……もう……しつ、こい……んだか、らあ……！」

【“……过……啊……已经……别、来……所以、说……!”】

どんなに好き勝手に貪られても目の力だけは失わず、非难するかのようアニスフィアはユフィリアを睨む。【不管怎样被喜欢的人贪婪的索取也没失去眼睛的力量，安妮丝菲娅责备般地瞪着尤菲莉亚。】

弱々しくも、それでも抗議せんとするアニスフィアの表情を見てユフィリアは言い知れぬ甘い诱惑に身を震わせる。自分でもどうかと思う程に、アニスフィアを貪りたくて仕方が無い。

【虽然很软弱但还是想抗议，安妮丝菲娅这样的表情让见到了的尤菲莉亚在难以言喻的甜蜜诱惑中打了个寒战。连她自己都觉得不可思议，想要贪婪的吃掉安妮丝菲娅的想法是那样的强烈。】

心臓の鼓動が大きく高鳴る。自分自身をも振り回す激情に身を委ねたくなる。それをゆっくりと息を吐き出す事で堪える。【心脏剧烈

地跳动。想要委身于不断地折腾自己的激情之中。她慢慢地吐气试图来忍耐那个欲望。】

「……アニスが美味しいからダメなんです」

【“……因为安妮丝太好吃了所以不行”】

「人を……なんだと、思って……」 【“把人家……当什么了，心里面……”】

「爱しい人ですよ」 【“是心爱的人哟”】

朱色を増しながらもアニスフィアはユフィリアを睨む。それすらも可愛いなのだから、この人は自分がどれだけ迂闊なのか理解しているのだろうか、とユフィリアは思う。

【又增添了些红色的安妮丝菲娅死死瞪着尤菲莉亚。连这样都是如此可爱，这个人能知道自己有多迂腐嘛，尤菲莉亚心想。】

こんな顔を見れるのは自分だけ、普段は明るく振る舞って皆を振り回すような人が自分の手の中で喘ぎ、溺れている。その実感が全身を震わせる程に爱おしさを感じさせるのだ。

【能看到这样的脸的只有自己，平时表现得很开朗，把大家都折腾得团团转的人在自己的手中喘息，沉溺。这种实感让人喜欢到到全身颤抖。】

ちょん、と指で唇を触れればアニスフィアが恨みがましく上目遣いで睨んでくる。そのまま指を口の中に押し込んでしまいたいと诱惑に駆られながら、ユフィリアは唇をなぞるだけに留める。

【稍微，用手指去碰了碰嘴唇就或许会让安妮丝菲娅恨恨地抬眼瞪了过来。在好想直接把手指塞进她嘴里的这种诱惑的驱使下，如此想着的尤菲莉亚只是在嘴唇上比划了一下。

(……これ以上食べると怒られますよね) 【(……再继续吃下去会被怒斥的吧。)]

アニスフィアの魔力量は多い。それでももう半分以上は貪っただろうか。流石に空にまでさせてしまうと回復に時間を要してしまうの

で止めておかなければならない。過去にやりすぎた結果、接触すら禁止された記憶はユフィリアにとって苦い記憶として残っている。

【安妮丝菲娅的魔力量很多。但即便如此还是大概有被要走了一半以上。因为如果完全清空的话就肯定需要时间来恢复所以必须停下来。过去那因为做得太过分，导致连接触都被禁止掉了的记忆成了尤菲莉亚残留着的痛苦回忆。】

しかし、やはり物足りなさはある。糧を得るという意味では十分だが、アニスフィアを愛でたいという欲求は逆に膨れあがっている程なのだから。

【可是，果然还是觉得不够。从能得到“食物”的意义上来说已经足够了，但想要去疼爱安妮丝菲娅的欲望反倒是更膨胀了。】

「アニス」 【“安妮丝”】

ユフィリアはアニスフィアに触れるようにキスをする。同時に自分の魔力を押し流すようにアニスフィアへと送り込む。【尤菲莉亚抚摸着安妮丝菲娅并去吻了她。同时也把自己的魔力像冲走一样地送到了安妮丝那边】

キスをむずがるように嫌がっていたアニスフィアだが、ユフィリアの魔力を感じればおずおずと唇を重ねる。大量に失った魔力を取り戻そうとするように啄む。

【虽然安妮丝菲娅并不喜欢接吻，但只要感受到尤菲莉亚的魔力就会战战兢兢地将嘴唇贴上来。似是想要夺回大量失去的魔力一般地啄。】

濡れた唇が仅かな水音を奏でる。わざと音を立てようとするユフィリアにアニスフィアは柳眉を立てるも、魔力を取り戻すのを優先したのか文句を言う事はなかった。

【湿润的嘴唇发出微弱的水声。对于故意发出声音的尤菲莉亚，安妮丝菲娅竖起了柳眉，不过并没有对她恢复魔力的行为表示抱怨。】

「……ユフィ……もう……いい……変に、なるからあ……」

【“……尤菲……可……可以了……变化，已经有了……”】

暫くユフィリアの魔力を啄んでいたアニスフィアだが、息を荒くしながら力なく首を左右に振る。【暫且啄食了尤菲莉亚的魔力的安妮丝菲娅她，喘着粗气无力地左右摇头。】

ユフィリアの魔力を受けとる事が出来るアニスフィアだが、それは魔力の交換に等しい。自分のものではない魔力を受けとる事はアニスフィアには手慣れたものだが、だからといって大量に摂取をすれば酩酊してしまうのだ。

【接受尤菲莉亚的魔力对安妮丝菲娅来说，那等于魔力的交换。接受不属于自己的魔力对安妮丝而言是很熟练的，可如果因此大量摄取的话就会酩酊大醉。】

こうなってしまうえばアニスフィアの抵抗もほぼ无に等しい。くす、と小さく笑いながらユフィリアはアニスフィアの体に身を寄せる。

【这样一来安妮丝菲娅的抵抗也几乎等于是无效。于是，小声笑着的尤菲莉亚凑到了安妮丝身上。】

「夜は、まだ長いですからね」 【“夜晚，剩下的还长着呢”】

ふっ、と耳に息を吹きかけるように囁けばアニスフィアの体が震える。身を擦るアニスフィアを捕まえるように腕に抱きながら、ユフィリアは満足げに笑う。

【呼，像吹气一样低声私语让安妮丝菲娅的身体颤抖。扭动着身体的安妮丝菲娅被抓捕住抱在怀里，尤菲莉亚满足地笑了。】

アニスフィアの体を這い回るようにユフィリアの手が蠢く。体を重ね合ったせいで乱れた衣服を手慣れた様子でユフィリアははだけさせていく。するすると動く手が服を脱がしていくと、アニスフィアがユフィリアを睨んでいた。

【尤菲莉亚的手在安妮丝菲娅的身体上蠢蠢欲动。尤菲莉亚熟练地解开因为身体交叠而被弄乱的衣服。被用手敏捷的脱下衣服，安妮丝瞪了眼尤菲莉亚。】

「……手付きが慣れてていやらしい」 【“……这熟练的手法最下流了”】

「アニスのここもいやらしいですよ」 【“安妮丝的这儿同样很下流哦”】

ぴん、と立っていた乳首を掠めるように指を滑らせればアニスフィアの腰と声が跳ねた。【随之，立起的乳头被用手指划过的安妮丝菲娅的腰和声音都蹦了起来。】

アニスフィアを横抱きにするように抱えながらユフィリアが両胸の乳首を交互に抚でるように触る。程よい大きさの胸は触り心地が良い。そのまま没頭するようにユフィリアは胸を抚で回していく。

【尤菲莉亚一边横抱着安妮丝菲娅一边交替着去抚摸她两侧的乳头。大小适中的胸部摸起来很舒服。尤菲莉亚就这样专注着去抚摸她的胸部。】

「ふ……ッ……う……！ ひ、……く う……！ 」

【“唔……！唔、……唔唔……！ ”】

「我慢しなくて良いんですよ……」 【“不需要忍耐着哟……”】

「して、な……！ あっ、ッ、……つまむ、にゃあ……！ 」

【“做、什……！ 啊、啊、……别，捏啊……！”】

吕律が回らずに跳ねた言葉と同時にアニスフィアが身を振る。ユフィリアの手を掴んで离そうとするも、何も果たさずにユフィリアの手に添えるだけだ。

【在口齿不清地蹦出这句话的同时安妮丝菲娅也扭动着身体。想要抓住尤菲莉亚的手来取悦她，却只是在什么也没做到的情况下被她扶在手上而已。】

「ふふ……こっちの方がいいですもんね」 【“呼呼……感觉还是这样比较好。”】

「ひっ、ツツツ……あ……！ や、めっ……！ ああ、アアアッ!？」

【“伊、啊……啊……！ 呀、别……！ 啊啊，啊啊啊啊！ ？”】

胸よりも反応が跳ねたのは、脐。【比胸口反应还要大的是，肚脐。】

胸から滑るようにして脐へと降りた指がくりくり、と押し込むように脐を抚でる。するとアニスフィアが仰け反って体を震わせる。

【她的手指一路从胸口滑到了肚脐，然后揉捏着肚脐。安妮丝菲娅不禁仰起身子颤抖了起来。】

「脐、やだ……やだあ……！ さわ、っちゃ……や……ッ、だ、からあつ！ おす、なあ……！」

【肚脐，不要……不要啊……！ 触碰，还有……呀……啊，所，所以说！ 喂，好嘛……！ 】

「どうしてですか？」 【“为什么呢？”】

「あひいっ!? ユフィ、の、せい、だあつ！ もう、おへそ、変になって、る……からあ……！ ぐりぐり、や、だあつ……！」

【“傻瓜！？ 尤菲、的、错、啊！ 已经，肚脐，变得，奇……奇怪了啦……！ 咕嘟咕嘟、不、要啊……！”】

先程よりも余裕の失せたようにアニスフィアが首を左右に振る。それは胸に触れられたいた時よりも反応が顕著だった。

【似乎是失去了先前的从容的安妮丝菲娅往左右方向摇了摇头。这比起被触碰胸部时的反应更为显著。】

脐はアニスフィアにとって感じやすい性感帯として“開発”されきってしまった。それも誰のせいかと言えば、先程から楽しそうに弄んでいるユフィリアのせいなのだが。

【肚脐是安妮丝菲娅已被“开发”出的很容易有感觉的敏感带。要说这是谁的错，那是因为尤菲莉亚从一开始就玩得很开心。】

腹部は力の集まる部位として知られる事が多いが、魔力においても似たような事が言える。魔力を糧として好むユフィリアにとってお腹とは“吸い付き甲斐がある部位”であり、すっかりと目をつけられた為、散々いじり回されたのだ。

【许多人都知道腹部作为是力量聚集的部位，在魔力层面上也可以说是类似。对以魔力为食粮的尤菲莉亚来说肚子则是“有吸取价值的部位”，因为完全盯上了，所以就随意摆弄。】

時には指で掻き回され、時には舌で舐られ、時には服ごしで焦らされ。すっかりと覚え込まされた感覚が腹部から広がっていき、アニスフィアの目の前に星が散って弾け飛ぶ。

【有时被手指搅动，有时被舌头折磨，有时被衣服烧焦。完全被记住的那些感觉从腹部扩散开来，星星在安妮丝菲娅的眼前四散弹飞。】

「あっ……、だ、めっ、離し……だ、めっ、イツ……ちゃ、イク、おへそ、で、やだやだ、イクツ……！　　ウウウウツ……！　　アアアアツ!!」

【“啊……，不，不要，拿开……不，要，啊……等，要去，肚脐，等，不要不要，要去了……！哇哇哇哇哇……！啊啊啊啊啊！！”】

ユフィリアの手から逃れようと力を込めれば、指の感覚が逆に鮮明になってしまう。それでも体に力が込められるのはアニスフィアの意志ではもうどうにもならず、空気を押し出すように押し込まれたユフィリアの指で絶頂まで上り詰める。

【为了摆脱尤菲莉亚的手而用力，感觉到的手指反而变得是鲜明了起来。尽管身体仍充满着力量但安妮丝菲娅的意志却已是无能为力，像要被挤出空气一样给尤菲莉亚塞进来的手指送到了绝顶。】

弓反りに仰け反っていたアニスフィアの体が再びベッドに沈む頃には、ユフィリアの指は脐から抜け出て、その指をユフィリアはご机嫌な様子でぺろぺろと舐めている。

【当仰面的安妮丝菲娅那弓起的身体再次落回到床上时，尤菲莉亚的手指也已从肚脐里钻了出来，那根手指还被尤菲莉亚带着愉快的表情舔舐了起来。】

「……ばか」 【“……笨蛋”】

アニスフィアの小さな悪態にもユフィリアはご机嫌になるばかりだった。

【安妮丝菲娅稍稍有些不好的态度也只会让尤菲莉亚心情愉快。】

もう知らない、と言うようにアニスフィアは視線をユフィリアの顔から逸らす。

【我已经知道了，仿佛这样说了安妮丝菲娅将视线从尤菲莉亚的脸上移开。】

「もう……好きに、して……」 【“已经……随便你，怎么做了……”】

「……好きにされたい、が本音じゃないですか？」

【“……想被喜欢，这难道不是真心话吗？”】

耳元で囁かれたユフィリアの声に甘い痺れが走る。【在耳边低声私语的尤菲莉亚的声音带来了一阵甜麻。】

横抱きに背中から抱き締められるように体勢を変えられ、そのままユフィリアの指がアニスフィアの下着をするりと脱がせていく。

【像从背后抱住似的改变了她身体的姿势，尤菲莉亚的手指就这样飞快地脱下了安妮丝菲娅的内衣。】

抵抗するのも最早億劫だと言うように、ユフィリアの動きに合わせて下着を足から抜く。露わになった秘部は誰の目から見てもわかる程に濡れそぼっていた。

【似乎连抵抗都已变得是很麻烦了，配合着尤菲莉亚的动作从脚上脱出了内衣。露出来的私处无论是谁都能看出已经湿透了。】

散々ユフィリアに弄ばれた体は、ユフィリアの魔力で酩酊しつつあったアニスフィアには最早毒を回されたと言っても过言ではない程に熱に浮かされていた。脐にされた爱抚でお腹の奥が切なくなる程に呻いているのを嫌でも感じる。

【被尤菲莉亚玩弄过无数次的身体，在尤菲莉亚的魔力下已经酩酊大醉的安妮丝菲娅甚至可以说早已被毒死了。肚脐处的爱抚让她从肚子深处发出痛苦的呻吟。】

欲しい、と。そう思うのに言い出せないのは、やはりどんなにしっかり者でも年下であるユフィリアに言いようにされるのは癪だと、小さなプライドが邪魔をする。

【想要，去。心里这么想却又说不出来，果然不管对方再怎么能干都只要被比自己小的尤菲莉亚这么说了就会让人生气，她小小的自尊心是这么妨碍到她的。】

そんなアニスフィアを微笑ましく思いつつ、あまり虐めると本当に泣きかねないので今日はここまでにしておきましょう、とユフィリアは矛を収める。後は——ただ溺れさせて、溺れたい。そうしよう、と。

【一边对这样的安妮丝菲娅微笑着一边想，如果太欺负人了的的话真的会有让她哭的可能所以今天就到此为止吧，遂尤菲莉亚停止了攻势。之后呢——只想让她沉沦，沉沦下去。对，就这么办吧。】

「入れますよ」【“可以进来了哦”】

ふとももをなぞるようにして内股へと迫り、ユフィリアの指がアニスフィアへと滑り込む。潤滑液としては十分過ぎる滴りはユフィリアの指をすんなりと呑み込んでいく。

【顺着大腿逼近大腿内侧，尤菲莉亚的手指滑进了安妮丝菲娅的体内。作为润滑剂已十分足够的液滴将尤菲莉亚的手指整个裹入其中。】

「あ、あ……！ き、た……はい、った……！」

【啊，啊……！ 到，了……是，到了……！】

口を半开きにしながらアニスフィアが悶える。既に目は荡けきっていて、涎が零れて口の端を伝っている。

【半张着嘴的安妮丝菲娅发出了闷声。眼神已经变得放荡，口水也从嘴角淌过。】

きゅうきゅうと狭いぐらいの中はユフィリアの指を締め付けるように震えていて、反応の良さにユフィリアの胸もきゅんきゅんと締め付けられてしまう。

【尤菲莉亚的手指在狭小的空间中不住的颤抖，灵敏的反应让尤菲莉亚的心也跟着揪得紧紧的。】

もっと自分の存在を感じて、刻み込んで、忘れられなくして。そう思えば心は天にも升る程に喜び勇んでしまう。アニスフィアを求めて止まず、ユフィリアは身を乗り出してアニスフィアに口付ける。

【要更多的感受到自己的存在，要铭刻在心，让她无法忘记。这么一想就会兴奋得如同是升上了天空。不停地索取着安妮丝菲娅，尤菲莉亚探出身子将安妮丝菲娅的嘴给夺去了。】

「ん……！ んん……！ ちゅ、ぱ……ん……ユフィ……」

【“嗯……！ 嗯嗯……！ 啾，啾……嗯……尤菲……”】

ユフィリアの口付けにアニスフィアは夢中で舌を差し出す。差し出された舌を絡め取りながら、指も奥へと押し込んでいく。

【安妮丝菲娅半梦半醒的伸出舌头回应了尤菲莉亚的吻。别人一边缠住那伸出来的舌头，一边把手指往某处里面塞。

根本まで入り込んだ2本指を中を広げるように開いて、交互にくねらせれば小さくない水音が響く。手がふやけてしまいそうだと思いますながら、ユフィリアは指に魔力を込める。

【将伸进最里面的两根手指张开，交替扭动并发出了不小的水声。尤菲莉亚觉得自己的手快要泡胀了，但还是将魔力注入进了自己的手指里。】

ユフィリアの指に缠わり付いていた爱液が魔力に反応していく。ユフィリア自身の手から出てきた水と混ざり合って指を一回り、二回りと大きく伸ばしていく。

【尤菲莉亚手指上缠绕着的爱液对魔力产生了反应。和从尤菲莉亚自己手上所产生的水混在一起，一圈两圈地逐渐延伸。】

「ひいつ、あつ……！ それ、き、たあ……♡ おつきい……♡」

【“伊，啊……！ 这，到，到了……♡ 来着……♡”】

「奥までくすぐりますからね」 【“会一直弄到最里面的呢”】

「きて！ もう、好きにしてえ！ 奥、奥触って、いいからあ！」

【“快点！ 已经，随你的便了！ 碰，碰一下里面，行行好吧！”】

早く、と首を左右に振りながらアニスフィアが恳愿する。水で作出した指はユフィリアの意のままに新たな関節となってアニスフィアの奥へと滑り込む。

【快点，左右摇头着的安妮丝菲娅如此恳求道。由水魔法组成的手指按照尤菲莉亚的意愿变成了新的关节并滑入了安妮丝菲娅的深处。】

そして指が触れたのは——子宮の入り口だ。それをくすぐるように2本の水指で触れていく。

【然后手指碰到的是——子宫的入口处。到此别人打算用两根“水指”去触碰那里。】

「ああ——っ!? あ、あああああっ、あっ、ひい、や、あ、あああああッ! ユフィ、そこ、いい、そこ、もっとお! もっと、掻き混ぜてえ!! もう、苦しい、苦しいのお! 早く、早く楽にさせてえ!!」

【“啊啊——! ? 啊，啊啊啊啊啊，啊，咿，呀，啊，啊啊啊啊啊啊! 尤菲，那里，对，那里，更多的! 更多，再多搅动一下那里!! 还，很难受，很难受啊! 快，快让我感受到那种快乐!! ”】

ユフィリアに体を預けながらアニスフィアが体を仰け反らせる。苦悶と喜悦が入り交じった荡けた顔で悩ましそうな艶声を上げる。

【安妮丝菲娅把自己靠在尤菲莉亚身上仰着身子。苦悶和喜悦交织在一起摇荡着让脸上的烦恼化作是了艳声。】

膣内をユフィリアの指と水指が這い回る。ここまで体を許せば、アニスフィアは理性まで荡かしきって与えられる快感に素直になる。本人はここまで乱れるのが嫌だからこそ抵抗するのだが、1度なってしまえばもうなりふり構わずだ。

【阴道中有尤菲莉亚的手指和水指在爬行。在把身体放纵到这种程度时，安妮丝菲娅便会完全丧失理性并坦率地接受被给予的快感。正因为本人不喜欢乱到这种地步所以才会抗拒，可一旦乱到这种地步也就再也没有办法伪装了。】

「すき……っ、すきい! ユフィ、ユフィ、もういいから! もう全部あげるからあ! 魔力も、私も、全部、全部う! 灭茶苦茶にしてよお、早くう!!」

【“喜欢……喜，喜欢! 尤菲，尤菲，现在已经可以吧! 我已经全部都给你了! 无论是魔力，还是我自己，全部，全部都! 就放马过来吧，快一点!! ”】

ごくり、とユフィリアは思わず唾を飲んでしまった。そこまで言われると貪りたい欲求がむくむくと起き上がってくる。でも、今のアニスフィアは理性が飛んでる状態だ。正気に戻ったら机嫌を損ねるのは間違いない。

【咕嘟一声，尤菲莉亚忍不住咽了一口唾沫。听到这里贪婪的欲望一下子就都涌了上来。但是，现在的安妮丝菲娅是理性飞走了的状态。恢复正常后这肯定会破坏她的好心情。】

それでも、あとちょっとなら、ほんの少しなら、加減してなら。数度、言い訳を重ねたユフィは指の腹を押し当てるように奥へ、水指をくねらせ、振動を交えながらとぐろを巻いて膣内を押し広げさせる。

【即便如此，如果还差一点儿的话，一点点的话，请原谅我吧。有好几次，像是要用指腹去抵住对方似的尤菲莉亚都这样在心里重复道，她扭动着水指，将其摇晃着缠成一团并在阴道内展开。】

そしてかぶりつくようにアニスフィアの唇を奪い、魔力を吸い上げる。渇いた大地が水を吸うように満たされていく魔力がユフィリアを幸福感の沼に引き折り込む。

【然后大口含住了安妮丝菲娅的嘴唇，吸走她的魔力。如干渴的大地终于吸满了水般充盈的魔力将尤菲莉亚拉入了幸福感的沼泽。】

「ふはっ、アニス……アニス、アニス！」

【“呜哇，安妮丝……，安妮丝，安妮丝！”】

「ユフィ、ツ……あっ♡ も、だめ、きたきた、きたあっ！ ……ツ、もう、イク……ツ……イツちゃう！ 灭茶苦茶に、されて、イツ……ちゃ……！」

【“尤菲，呜……啊♡已经，不行，来了来了，来了啊！ ……已，已经，要去了……来……来吧！放马过来吧，速度点，去……了……！”】

焦点が合っていない瞳でアニスフィアが快感に打ち震えながら絶頂に上っていく。最早収まりきらず、だらしなく出ていた舌ごとユフィリアが口づけて貪る。

【安妮丝菲娅带着失去焦点的眼瞳在颤抖中随快感上升至了绝顶。因为早已按捺不住了，尤菲莉亚吻住了她并似是要贪婪的将她那邈远的舌头也给吞噬掉】

アニスフィアの娇声はユフィリアによって貪られ、飲まれ、くぐもった声となる。

【安妮丝菲娅的娇声尽数被尤菲莉亚贪婪的吞噬、饮用掉，声音开始变得含糊不清了起来。】

「————ツ、————ツ！　ンウーーツ……！　ンふ……♡　は……あ……♡」

【————呜，————呜！　呜——呜……！　呜……♡　哈……啊……♡”】

アニスフィアの白目にまでなりかけていた瞳がぼんやりと降りてくる。そのまま目を闭じて、かくん、と意識が落ちる。

【阿尼斯菲亚那快要翻白了的眼瞳朦胧地垂了下来。就这样闭上了眼睛，很快，意识陷落了下去。】

完全に意識が落ちてしまったアニスフィアを見て、ユフィリアはさあつ、と顔を青くさせた。粘着質な水音を立てて抜かれた指を見て、たらし、と汗を掻く。

【看到意识完全陷落下去了的安妮丝菲娅，尤菲莉亚啊的一声，脸色瞬间变得发青。看着被拔下的手指发出黏糊糊的水声，不由得，出了一身汗。】

「……やりすぎました」　【“……自己这也太过分了”】

怒られるの確定ですね、と。ユフィリアはアニスフィアが起きた時の反応を想像して、ぺろりと名残惜しげに指についた爱液を舐め取った。

【肯定要被骂了呢，没办法。尤菲莉亚想象着安妮丝菲娅在起来时的反应，不舍地舔了舔残留在手指上的爱液。】

＊　＊　＊

そして、翌朝の事である。【然后，是翌日早上的事情。】

「フカー……ッ！」 【“噗……唔！”】

ベッドの上で、布団に丸まりながらアニスフィアがユフィリアを威吓していた。

【在床上，蜷缩在被子里的安妮丝菲娅对尤菲莉亚做出了威吓。】

近づけばひっかくぞ、と言わんばかりの勢いだ。毛を逆立てた猫のような声をあげているアニスフィアを見て、レイニは呆れたように溜息を吐いた。

【再靠近是会被抓的，一副似是要这么说的架势。注意到安妮丝菲娅发出像炸毛的猫咪一般的叫声，蕾妮有些吃惊地叹了口气。】

「……こればかりは、ユフィリア様も学习しませんね」

【“……只有这一点，尤菲莉亚大人从来都不会长记性呢”】

「うう……」 【“嗯嗯……”】

何も言い返さず、寝间着のまま膝を抱えるユフィリア。朝、目を覚ましたアニスフィアにベッドから叩き出されたユフィリアは幸せな夢から覚め、なんとかご机嫌を取ろうとあれやこれやと手を尽くしていたのだが、アニスフィアは遺憾の意を示すだけだ。

【什么话都没有说，穿着睡衣的尤菲莉亚就只是在抱着膝盖。早上，醒来了的安妮丝菲娅通过将其从床上拍下来的方式让尤菲莉亚离开了幸福的梦境，尽管为了让她开心而想尽了各种办法，但从安妮丝那边得到的反馈却很遗憾。】

すっかりと脐を曲げてしまったアニスフィアを諷めていると、レイニが呆れた顔で入ってきた訳だ。まるでこうなる事がわかっていた、と言うように。

【安妮丝菲娅就那么愕然的看着自己全部都扭曲了的肚脐，走了进来的蕾妮一副无动于衷的样子。早就知道事情会变成这样了，像是在这么说着。】

「だからもうちょっと小出しに貰うべきだって言ったじゃないですか」

【“所以说我不是都讲了只能稍微拿走一点点的嘛”】

「はい……」 【“是的……”】

「いつ忙しくなる身かもわからないんですから、毎回忙しいのを抜ける度に貪られたらアニス様だって怒りますよ」

【“也不知道从什么时候起就变得忙起来，如果每次忙完都被这样所要的话就算是安妮丝大人也会忍不住生气的。”】

「仰る通りです……」 【“你所言极是……”】

「素直にもうちょっと甘えて我慢してくださいね？ ユフィリア様」

【“拜托你就再乖一点再多忍耐一点多对她撒撒娇吧？尤菲莉亚大人”】

（……饿えてる時の方が美味しいので我慢したくなるんです、と言ったら怒られるでしょうか？）

【（……因为饿的时候会更好吃所以答应会忍耐一下，要是这样说的话会挨骂吗？）】

内心、邪な考えを浮かべているとレイニにジト目で睨まれている事に気付いてユフィリアは表情を取り繕う。

【内心里，意识到自己正因这样的想法而被蕾妮瞪着的尤菲莉亚稍微掩饰了一下自己的表情。】

最近、何故か身近な人に感情が読まれやすくなっていると感じるユフィリアであった。周囲から見ればバレバレなのであったが。

【最近，尤菲莉亚觉得不知为何身边的人好像开始越来越容易理解自己的感情了。但在周围人看来这一切全都是显而易见的。】

「はあ……まったく、これじゃあ酷い事になってるんじゃないですか？ ほら、アニス様。布団离してください」

【“啊……真是的，这下事情不是别的很严重了吗？来吧，安妮丝大人，请从被子中出去。”】

「やだ」 【“不要”】

「やだ、じゃないですから……」 【“不要，这么说好像也不对……”】

汗や体液やらで酷い事になってるだろうシーツに溜息を吐きながらレイニは回収しようとするも、アニスフィアが駄々をこねた幼子のように布団を離さない。

【对那被汗水和体液弄得很糟糕的床单表示叹息的蕾妮想要将其回收，但安妮丝菲娅就像在耍赖的小孩子似的不肯把其放开。】

「あ、えっと処理はしたのでそこまで酷くはないと思うのですが……」

【“啊，已经稍微处理过了问题现在应该没那么严重了吧……”】

「……処理って、どんな風に？」 【“……处理，用的是怎样的方式？”】

「……隅から隅まで綺麗に頂きました」 【“……总觉得每个角落都很漂亮呢”】

「最ッ低ッ!!」 【“最差劲了！！”】

ユフィリアの告白にアニスフィアが涙目になって叫んだ。そしてシーツに丸まったまま、部屋を飛び出していってしまう。

【听到尤菲莉亚的“告白”的安妮丝菲娅泪眼汪汪地大叫了起来。接着就那么甩开裹住身子的被单，从房间里飞奔了出去。】

「あぁっ！ ちょっと、アニス様！ 几ら离宫の中だからって裸で走り回らないでくださいッ!! ……ユフィリア様は反省ッ！」

【“啊喂！ 慢着，安妮丝大人！ 就算是在这离宫中也不许光着身子乱跑！！ ……也请尤菲莉亚大人您务必要反省自己的错！”】

「はい……」 【“好的……”】

この日から数日、ユフィリアにアニスフィア接触禁止令が出されるのであった。

【于是在从这天起的数日，尤菲莉亚被下达了禁止再去接触安妮丝菲娅的命令。】

2人がちゃんと仲直りが出来たかどうかは、またそれは別のお話で。

【至于两个人还能不能和好的话，那是另外的事情了。】

完